



NO.415

R4年2月1日

発行

〒869-1217

熊本県菊池郡

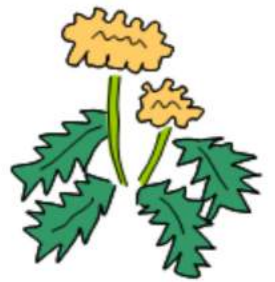
大津町森54-2

社会福祉法人

三気の会

三気の里

☎096-293-8100



「年頭の挨拶

理事長 松田 健



ルを打ち上げる国もあります。地球という生命体が存亡の危機にあるとさえ思ってしまう。

全世界からすると極めて小さな集団である職場ではどうでしょうか。

今年もよろしくお願いいたします。昨年はたいへんお世話になりました。感謝申し上げます。(会議で職員に話したことを要約して掲載させていただきます。一部加筆修正していただきます。)

手を取り合って「苦」を共有し、そのとげとげしいかけらをひとつひとつ丁寧に取り除き、新しい「希望」という名の断片を一つずつ拾って、積み上げていくことができれば光明が差すのでないかと本気で思っています。

・全世界同じウイルスが蔓延し、「苦」を共にしています。みんな同じ時代を共に生きています。この危機に対し手を合わせて乗り越えていけるかどうかは非常に大きな分岐点であると思います。地球存続のための神様がくれた試練でありチャンスなのでないかと不謹慎ながら妄想する時があります。ですが残念ながら紛争が絶えず、平気でミサイ

・特に会議時間の時間厳守の徹底をお願いします。開始前に着席していること、終了時間を守ることを守れない方は良い仕事ができません。また、課などの所属の中で、時間が疎かなスタッフがいれば、その課は周知徹底が図れていないと評価してしまいます。上司は部下に指導し、部下は上司の指示に応じるように務めてください。

・「フランス・ベーコン」という哲学者の言葉で、「読むことは人を豊かにし、話し合うことは人を機敏にし、書くことは人を確かにする。」という言葉があります。

①「読むことは人を豊かにする」

本を読むこと。無知の知という言葉もあります。分からないから理解するために勉強する。勉強することで相手の気持ちの理解に繋がっていく。

②「話し合うことは人を機敏にする」

人は人の影響を受ける。原動力の基になったりする。このスタッフがいるから頑張れると思えたりすることもある。コロナにより人と会ったりすることが難しいですが、良質なコミュニケーションを取りましょう。

③「書くことは人を確かにする」

機関誌たんぽぽは、自分の考えを書いたりする。書くこと責任が生まれる。自分自身の指標や証にもなる。生き方がぶれないようになります。

・仕事への達成感や喜びは色々な所にあると思います。例えば、食堂に設置しているペーパータオルをいっぺんに二、三十枚引つ張り出される利用者の方がおられ、その対策案を職員の方に募集し、案をしぼり、案を大きく4つに分け、グループワークを行い、一番賛同を得た案を実践しました。箱の改良、張り紙、支援による取り組みにより、利用者の方が1枚ずつ取る方が増え、利用者の方が注意されないで済むことに繋がっていききました。結果的に経費も抑えることができました。

・行事・イベントの後は、調子を崩すといったことがよく言われます。その通りだと思いますが、ではどうすべきなのかという点が欠落しています。データをとって対策を練るのがプロだと思えます。悪いことを利用者の方のせいにはしないというのが鉄則です。





# 2月



## 1班 「永遠の一年生」

令和4年の新年が始まり、久しぶりに帰宅された利用者さんの少しふっくらされた顔を見ることができ、幸せなスタートを迎えることができました。帰省された利用者さんに何を食べたか尋ねると「お雑煮。お餅。1、2、3個」「おせち」「お豆」とたくさんの答えが返ってきました。2年ぶりのお正月を自宅で過ごすことができたことの嬉しさと、美味しいお正月料理を堪能できたのだらうと思います。お正月のテレビ番組で、農家の方が「何十年と米を作っても、毎年同じ米はできない。毎年、農家の一年生たい。」と話している場面があり、私も三気の里に入職した頃は、利用者さんとどう接していいかわからず、反省ばかりでした。先輩方の指導を受け、乗り越えることができたと思っています。まだまだ足りない所だらけですが、入職した頃の謙虚で真剣な気持ちを持ち続け、初心を忘れない「永遠の一年生」として、利用者さんと共に笑顔の絶えない1年にしていきたいです。

支援員 中村 照美



## 2班 「レクリエーション」

先日、今年度最後のレクリエーションを実施しました。午前中にダイナミックリズムを行いました。体育館でリズム運動を行い、声かけに合わせて、歩く、走る、止まる、座る等、指示者の声掛けと集団の動きに合わせて、スムーズに応じることができていました。集会や人間教材では、椅子に座り、多くの利用者の方が視覚教材に目を奪われ、人間教材のサッカーで支援員がボールを蹴っている様子や座っている後方からボールが床に叩きつけられる衝撃音を聞いて反応を見たりしましたが、衝撃音を気に掛けるよりも、ボールが床に叩きつけられた後の行方を気に掛けるという方もいて、新たな発見がありました。午後からはドライブに出掛け、比較的利用客の少ない大津のスポーツの森の広場でおやつを食べました。皆さん久々の外出で沢山笑顔を見ることが出来ました。今回も外出の制限がある中での企画となりましたが、制限がある中で出来る事を見つけ、利用者の皆さんの生活にメリハリを与えられるように考えていきたいと思っています。

副主任 松村 雄一

### 「毎日の作業を通して」

今年も仕事始めから野菜の作業に大忙しの3班です。利用者さん全員で野菜の検品、袋詰めを頑張られています。日によっては1箱20キロある玉ねぎが数十箱くることもあります。作業の時間は限られているので利用者さんも支援員も時間に追われて休む暇もありません。そんな時、いつも検品作業をさせていただいているSさんが支援員の名前を呼んで「〇〇さん頑張れ~!!」と作業棟に響き渡る大きな声で優しく声をかけてくれます。その優しさにホッと肩の力が抜けて必死な顔をして作業をしていた私を笑顔にしてくれます。作業をしている場の雰囲気も穏やかになり「みんなで頑張りましょう」という前向きな気持ちにさせてくれます。同じテーブルのHさんも終わりが見えてくると「頑張りました！もうすぐ終わります！」と嬉しそうに伝えてくれます。その言葉に毎日の作業を通して利用者さんと気持ちを共有し、ともに喜びを感じられることが嬉しい毎日です。

支援員 江越 美保



### 「いくつになっても」

三気の里で3番目に高齢のNさんにとって、今年度は試練の年でした。不慮の転倒に加え、持病の悪化で長期間の車椅子での生活を余儀なくされる事になりました。入浴や排泄も2人掛りの時期もありましたが、入院治療やきついいりハビリを経て、すいぶん元気になりました。現在でも車椅子を使用されていますが、最近は「作業棟まで歩いてみたい」と自ら言われるほどです。洗濯物畳み等身の周りの事はもちろんのこと、きついいりハビリにも意欲的に取り組まれる姿はたくましくもあり、2人掛りでの支援が必要な時期を見てきたからこそ、とても嬉しく思います。寒い日がまだまだ続きますが、これからも“高齢パワー”を示され、若い人達に負けたくないよう頑張りたいと願います。

支援員 高村 茂子

### 「年のはじまり」

年末のお休みを自宅や三気の里、GHなどでそれぞれに過ごされた利用者の皆さんは、年が明けて、仕事初めの日に「明けましておめでとうございます」と元気に挨拶をされて登所されました。5班では毎年、仕事初めに初詣に行くことが恒例となっています。今年もコロナウイルスの拡大が懸念されている時期だったので、近くの窪田阿蘇神社に行きました。利用者の方も支援員もそれぞれに賽銭箱にお金を投げて、参拝しました。ずっと終わられる方、熱心にお参りをされる方それぞれで、皆さんどんなお願い事をされたのだろうと思いました。年明けからコロナウイルスのオミクロン株の感染が広がっていくばかりですが、この状況だからこそ「出来ること」を考えて色々なことに挑戦出来るような計画を支援員みんなで考えています。利用者にも皆さんが笑顔で過ごせるような1年にしていきたいと思ひます。

支援員 中村 圭助

# 療育雑記

「部屋が整うと心も整う」

事業課長 平川 聖子

Aさんがお部屋でため息をついている。「もっと部屋をきれいにしたいんだけど、片付かないですよねー。」という。どの辺が気になるのか聞いてみると、「クローゼットの中がごちゃごちゃ。タンスの中もごちゃごちゃ。」という。

毎日の日課で、洗濯物をたたみ、タンスに片付けることを施設に入所して以来続けている。しかし、Aさんのタンスは分類用の札をつけているにもかかわらず、いろいろなものが入り混じっており、物を取り出すときにタンスの中をかき回すためか、たたんだはずのものが崩れた形になっている。季節ごとに衣類の入れ替えもしていたが、季節外のものや居室内に保管していることで、いつの間にか取り出して普段使うものに混じってしまっている。触らない、使わないと言っているにもかかわらず

になって触ってしまうようだった。それでもAさんは整理された部屋にしたいと理想を描き、かけ離れた自分の部屋を見ては嘆いていた。

整理の基本はまずは物を減らすこと。いつも使っているものは居室に置き、使っていないものは居室外の押し入れに置いてみた。衣類はタンスを居室から出し、タンスの仕切りにしていたボックスだけを並べて、たたくんで分類して立てて入れ、ワンアクションで必要なものを取り出せるようにした。全ての衣類が一面に並んで見えていることがAさんにはとても分かり易かったようで、それだけでも表情は明るくなった。練習開始は3月半ば、ボックスに入る大きさにするために、衣類の角を合わせる、小さく折り曲げる。ボックスに立てるために、入っている衣類を手で抑えてスペースを作る。ボックスの底面や側面に合わせて衣類を入れる。これまでより細かな動きで衣類を扱うことになったが、毎日コツコツ練習していた。出来栄を確認しに行くと、時にはボックスに衣類が

並んでいないこともあったが、見直しを促すと自分で気づいて並べることができた。冬物から春物へ、そして夏、秋、冬と季節を一巡りしながら練習を重ね、Aさん自身が整理することに自信がついたところで、12月から再びタンスの中に衣類を入れて整理することにした。練習してきたボックスをそのままタンスに入れ、同じように立てて入れ、ワンアクションで取り出すようにしたこと、タンスの中は今も整理された状態で保たれている。

部屋が整うと心も整うと言われる。普段使わないもの、不要なものに囲まれて生活することは不要な刺激を受け続けることで、それだけで疲れてしまうものである。さらに必要なものが必要な時に出てこない、使いにくいとなればストレス倍増である。整理されているに越したことはないが、これが人に整理してもらっているのと、自分で整理できているのでは気持ちの整い方も違うと思う。自分のできる形を考え、提供し、身につくように練習を促すことは容

易ではないし、時間もかかるが、1年1年何か一つでも身につくように支援をしていきたい。環境を変える前のAさんは自分のもののある場所を人に確認しなければならず、そのたびに落ち着かなくなっていたが、今は自分で分かり不安に思う必要がない。整理された部屋は心整う部屋なのか、ひとり時間が延びている。



# 療育課

「目的を持った支援に繋げる」

支援課長 岩田 幸児

利用者の方への適切な支援に繋げることと同時に支援者の資質の向上を目的に、田中恭子医師によるケースカンファレンスを受けています。その中で、支援をするためには、まずは「しっかりとアクセスメントすること」、「データをとること」が大切だとアドバイスがありました。

私たち支援員は、経験を積み、利用者の方々との関わりが長くなると、これまでの経験や関わりを踏まえて、その行動の要因を推測し支援することがあります。ややもするとそれが利用者の方の状態を見誤ってしまうことにつながるものかもしれません。利用者の方の行動が、様々な条件（天気や曜日、体調、作業、関わる支援員、場面、場所、時間、周囲の状況、前後の行事等々）によって表出の仕方に変化があるのか。まずはデータをとり、どのような条件下で行動が表出するのか、データを基に検証した上で支援に繋げる。裏付けとなるデータを基に利用者の方の様子や行動を見ていくと、必ず

と必要な支援が見えて来るのではないかと思えます。

エビデンスに基づき支援員一人ひとりが意識しながら、自らの支援を振り返り、自分の支援に意味と目的を持って利用者の方々に接する。そのことが、支援員の経験や関わりに頼った見誤りを防ぎ、支援者の資質が向上する事になり、更には利用者の方への適切な支援を提供することに繋がっていくと考え、これからの支援に活かして行きたいと思えます。



## GWはじめ

「毎日の関わりのなかで」

支援員 金田 紘和

昨年末、Aさんが入院されました。三気の里を利用されている方々の多くは身体の不調や痛みの訴え（どこが、どのように）が上手ではありません。今回、普

段とは違った余暇時間の過ごし方や様子を心配し、翌日に通院したところ、イレウス（腸閉塞）との診断。そして命に関わるような危ない状況であるとのことで救急病院を紹介されました。前日に排便があっていたのに、、、と驚きました。なによりもコロナ禍の現在、病院側の制限も厳しく、入院中の付き添いもできない状況にあります。御家族の方の心配や不安も大きなものであったと思います。

自分では「痛い、きつい」と伝えることが難しい利用者さんを適切な医療に繋げる為には、普段の様子を知っていることが前提です。そして、普段と比べて様子が変わっていることに「気付ける力」や病院側に対し「説明できる力」も必要となります。私達が施設支援員として担っている役割の大きさを自覚し、日々の支援は利用者さん一人ひとりの普段の様子を学ぶことができる場面なのだと捉え、1つひとつの関わりを大切にしたいと思えます。



# 衛生委員会

「利用者の方を支える為に...」

主任支援員 佐藤 和也

労働者の安全と健康の確保、快適な職場環境を促すための法律である労働安全衛生法の下、この委員会を運営しています。生産性の向上、モチベーションの向上、人材確保の3つを柱に職場環境改善に向けてのアンケートを行いました。考えさせられる意見や逆にユニークな意見もあり、さまざまに思いで働いていることを確認できました。

私は入職時に「支援員は黒子として利用者の方を影から支える」ということを教えられました。例えば舞台であれば音響や照明、製作など陰で支える人がいて、すばらしいステージが出来上がります。三気の里も支援員だけでなく事務や厨房、運転手等、たくさんの方が主役である利用者の方を支えています。利用者の方のより良い暮らしを支えるスタッフがベストな状態で仕事ができるよう、より良い職場環境作りに努めていきたいと思えます。

## 2月スケジュール

3日(木) わっふるステップアップ講座  
 4日(金) アンパ創作クラブ「クッキー作り」  
 11日(金) 嘱託医来診  
 14日(金) 音楽クラブ バレンタインlive  
 15日(火) 田中Drケースカンファレンス  
 16日(水) 4班・5班レクレーション  
 誕生会  
 18日(金) ダイナミックリズム  
 アンパの日

24日(木) 3班レクリエーション  
 毎週月曜日 訪問理容サービス  
 毎週木曜日 ローソン移動販売  
 BeTREE  
 <営業時間>  
 8:00~18:00



betree314

# 栄養士便り

「食堂での出来事」

栄養士 前田はる美

利用者の方の加齢に伴い、嚥下機能の低下も心配され、特にこの一年、利用者の方の食事の摂取の仕方や飲み込み方を気に掛けながら、見守りをさせていただいていきます。しっかりと咀嚼しないまま飲み込んでしまい、喉に詰めたりするなど、万が一の事故をできる限り防ぐためです。そうやって見ていくと、普段とは違う食べ方や表情によって体調の変化を感じ取ることもできます。利用者の方それぞれの食べ方の特性や嚥下の状態によって、食材の大きさや軟らかさを変更します。

このように、五感を働かせながら食堂に立つ事は、緊張感を伴うものですが、利用者の方と身近に触れ合える貴重な時間でもあります。

先日、利用者Aさんが、「同じ班のBさんはずくと帰ると

らんよ、ずくとよ。」と私に心配そうに言いました。Bさんは、ご両親の体調が優れず、更に世界的なコロナの影響も重なり、数か月帰宅できていません。しかし、そういうAさんも、他県にお住いの親御さんになかなか会うことができいません。Aさんと私の普段の会話は、「今日のおやつ何?夕食は何?」「今日の内容が多いだけに、余計にAさんの思いやりの心とやせなさを感じた出来事でした。



### 【寄付】

光行寺様 三気の里家族会様  
 米村秋江様 今池隆則様

### 【物品】

小牧博則様 前田眞澄様  
 柴田博子様 吉田和信様  
 千田英文様 中嶋久枝様  
 元田道雄様 小屋敷順子様  
 中原サト子様 ヤマモト住建様  
 知的障がい者施設協会様

### 【VO】

西村栄子様(生け花)

### 【後援会ありがとこ】

上田タキ子様 白井桂子様  
 田中基幹様 ヤマモト住建様

